

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

馬が走るとき、
脚の骨はしなっている

オークス、ダービーが終わったことによる「祭のあと」の寂しさも、そう長くは続かない。すぐに来年のクラシックを狙う2歳馬たちが競馬場に姿を見せてくれるからで、その意味でも競馬ファンはやはり恵まれていると言えるだろう。

そこで今回は、デビュー間もない2歳馬の健康について取り上げてみたい。お話しいただくのは、JRA馬事部獣医課の草野寛一さんだ。

2歳の若い馬でよく耳にする疾病に「ソエ」がある。前脚の、人でいうところの向こうずねの部分に炎症が起きて、場合によっては跛行することもある疾病だが、これは体の成長度合と密接な関係がある。「馬の2歳という年齢を人間の年齢に置き換えるのは難しいのですが、敢えて言うならば中学生くらいに相当するだろうと考えられています」

馬の1年は人の4年、などと言われたこともあったが、実際はそれほど単純で画一的なものではない。当歳時は人の6

第29回

2歳馬によく見られるソエとは？

12倍くらい速度で成長し、その後は(比較上の)成長スピードは次第に遅くなっていくと考えられている。とすると、2歳時にレースに出るころは、だいたい中学生くらいにあたるだろうということになる。

「このころは骨もまだ柔らかくて、馬が走るとき、脚の骨はしなっているんです」例えば鉛筆の両端を持って力を加えると鉛筆はしなるように曲がる。これと同じことが馬の脚の骨で起きているのだという。これを繰り返していると、もつともしなりの大きい鉛筆の中央部分には、やがて小さな亀裂ができるだろう。

「2歳馬の脚の骨でもこれと同じことが起きます。骨に亀裂ができるというのはつまり骨折ですから、細かい骨折を起していることになります。これがソエの原因です。ソエを専門用語でいうと『管骨(第3中手骨)骨膜炎』という炎症ですが、管骨にできた細かな骨折が原因で脚に熱を持ち、炎症を起すのです」

だからソエの発症部位は決まっております、管骨(第3中手骨)といういちばん細長い骨の、いちばんしなりの大きい中央部分で起きることが多い。

「ソエが出た馬への対処は患部を冷やすこと、そして骨に対する負荷を下げることで。調教の強さを下げるのもそうですが、骨への負荷は馬場によっても違うので、坂路やウッドチップコースなど負荷の少ない馬場で行うことも有効です。症状の軽重によりますが、数日から3カ月ほどで完治するものがほとんどです」

ソエは二度三度と繰り返して発症する

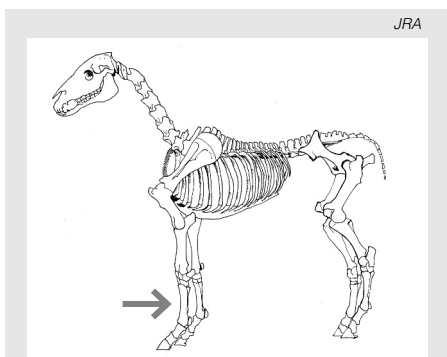
ただ、と草野さんは言う。「この疾病は繰り返すんです。おそらく多くの馬が、二度三度とソエを発症することになります」

すると、ちよつと困ったことが起きる。ソエの原因は骨折で、この骨折は細かいものであつて自然治癒するが、くつついた骨は前よりも厚くなる。これが二度三度と繰り返されると、ソエの発症部位はほとんど同じ場所だから、そこだけが瘤のように膨れてしまうのだ。骨瘤が出てくる馬は、過去にソエで苦しんだらうと推測もできる。さらにより重度になると、骨瘤にレントゲン写真にもくつきり写る

講師
JRA 馬事部 獣医課
草野寛一さん



案内人: 辻谷秋人
text by Akihito Tsujiya



ソエは、前脚の第3中手骨(矢印)に起きる細かい骨折が原因で発症する

ような大きな亀裂(皿状骨折)と呼ぶを生じることもあるのだという。「骨は加齢によって硬くなりますから、ソエが出るのは骨の柔らかい若馬だけでもないのです。骨がしなやかにならなくなると骨にかかる力の逃げ場がなくて、負荷の多くを骨自体で受け止めることになってしまいます。すると今度は直接的な骨折に繋がってしまうのです」

競走馬にとって骨の故障は、常に避けて通れない問題なのだ。